

【大学講演】

ケベックと北米大陸のフランコフォニー
(ニューイングランド、アカディア、
フランス語圏オンタリオ)

ピエール・ヌヴェー
(モンレアル大学名誉教授)

北米大陸のフランコフォニーについてお話しするにあたり、まずは地理的、歴史的、人口学的な説明から始めたいと思います。21世紀の今日、北米大陸の北東に位置する大きな州であるケベックが、アメリカにおける「フランス的事実」を体現しています。また、そのような事実の世界における相対的な顕在性を与えているのも、またケベックなのです。ケベックは、カナダ連邦のなかでかなり重要な政治的権力をもち、強力な制度を整え、フランス語を公用語、使用言語としてきましたが、このような2017年現在のケベックは、長期にわたる変遷の結果であり、その歴史とは、しばしば集団的悲劇、失われた幻想、残酷な喪の様相を呈してきました。ケベックがその所在地である北米大陸と保っている関係という問題を扱う場合に最も頻繁に用いられる表現の一つに、「失われた大陸」というものがあります。しかし、北米フランコフォニーに関する現代の大多数の著作のうちの一作は、このような敗北主義的なヴィジョンを超越しています。そのタイトル『失われた大陸から再び見出された群島へ *Du continent perdu à l'archipel retrouvé*』からしてそうです¹。まずはこのような喪失の歴史とその背景についてお話しし、再び見出されたと言われるこの「群島」とは正確にはどのようなものであるのかについて、明確にすることを目指したいと思います。

現代のケベック人にとっても、また皆さんのように遠く離れた地に住む方々にとってはなおさらのこと、かつて「フランス系アメリカ *Amérique française*」という夢が存在した時代があったことを理解することは難しいでしょう。現在の人口的な状況は、このような過去の展望を、ファンタジーやユートピアの世界に追いやるに十分でしょう。例えば、カナダ、米国、メキシコという北米を構成する3か国を見れば、約3億3千万人が英語話者、1億4千万人以上がスペイン語話者であり、フランス語話者は1千万人にも満たないのです。「フランス語がこの大陸上でマイノリティである」と述べることは、したがって婉曲的な表現です。しかし、かつてはフランス語に今とは異なった将来を思い描くことができた時代がありました。ここで16世紀から21世紀にわたるすべての歴史をお話しすることはできませんが、少

なくともその大筋だけは辿っておこうと思います。

この「フランス系アメリカ」という概念が、17世紀以降、いかにして形成されたかを理解するには、基本的な地理的事実を考慮しなくてはなりません。同じ世紀の初頭にこの大陸に到着した英国人たちが大西洋岸の現在のニューイングランドからヴァージニアの地帯に定住し、1世紀半にわたってほとんど内陸に向かう危険を冒さなかったのに対し、フランス人探検家は北東部からこの大陸に到着しました。彼らはセントローレンス川の河口に到着したのですが、この川の水源は五大湖であり、今日その近くには米国のデトロイトやシカゴの町があります。五大湖は大陸内部にあるばかりか、そこから今度は別の水路により、もう一つの大河へとつながっています。北から南へメキシコ湾にまで流れるミシシッピ川です。この水路により、フランス人たちは17世紀に大陸内部を領有したのです。しかも、南や西、今日のフロリダ、テキサス、カリフォルニアとして知られる領土の支配者であったスペイン人たちと対決することはありませんでした。

したがって元来、「フランス系アメリカ」（ヌーヴェル・フランスとも呼ばれます）とはカナダの一角であり、セントローレンス川の流域に相当し、そこにはケベックやモンレアルの町が築かれました。しかし、同時にその領土は内陸の広大な土地をも含んでおり、この土地はシャンブラン、ジョリエ、マルケット、ラディソン、ディベルヴィル、ラ・サールのようなフランス人探検家により開拓されたのち地図が作成され、その後小規模のフランス人コミュニティができました。アメリカの大都市デトロイト、シカゴ、セントポール（ミネソタ州）、セントルイ（ミズーリ州）といったミシシッピ川沿いの「西への門」は、いずれも当初はフランス人の建設した町であり、この地域に多数居住する先住民たちと大規模な取引も行っていました。

いわゆる「静かな革命期」の時期以前、つまり1960年代以前のケベックで最も影響力があった歴史家リオネル・グルー（Lionel Groulx）は、その晩年にこの「栄光ある時代」に捧げる大作を著しました。この時代を彼は、ややロマン主義的な呼び方で「われらの偉大なる冒険 *notre grande aventure*」と呼びました²。確かに、ここで一つの疑問が浮かびます。なぜこの強大な「フランス帝国」は失敗に終わったのか。これについても詳細にお話しすることができませんが、確かなことは、このように広大な土地には、もっと多数の人口が必要だったということです。しかし、フランス人がヨーロッパから移住することは稀であり、また五大湖付近やミシシッピ川沿いのフランス人コミュニティは小規模でまばらなものにとどまったのです。当時セントローレンス川流域に一致していた「カナダ」においてさえ、1760年時点でフランスから移住した人の数は1万人を超えませんでした。それとは対照的に、東海岸の英国人入植地にはすでに400万人が住み、独立して合衆国を創設しようという時期にありました（1776年）。

実際、フランスはこのような帝国を維持する手段も意志も持ち合わせていませんでした。18世紀半ばには、フランスはライバルである英国との戦争状態に入り、この戦争は北米にまで及びました。この戦争は1763年にヌーヴェル・フランスを英国へ譲渡する条約の調印により終了します。この時代に身を置くならば、フラン

ス語はこの大陸における将来を絶たれ、フランス語を話す少数のカトリック住民は、カナダや北米全域に支配を強める圧倒的なアングロサクソン民族に同化される運命にあったと考えることができるでしょう。その結果、カナダという言葉自体が意味を変えることになりました。つまり、それ以降フランス系でカトリックのセントローレンス川流域に相当する「下流のカナダ Lower Canada」と、英語系・スコットランド系でプロテスタントである五大湖地域に相当する「上流のカナダ Upper Canada」とに分かれたのです。下流のカナダは、その後カナダ自治領成立に伴いケベック州となりますが、この地域においてさえ、英語系移民が増加し始め、彼らが経済を掌握するようになりました。フランス人が1642年に「ヴィル・マリー」という名で建設したモンレアルの町では、19世紀半ばの数十年間に英語系が多数派を占めるに至りました。さらに、セントローレンス流域外の他の重要なフランス植民地、つまり現在のカナダの東部、大西洋岸のアカディアは、その間にほぼ壊滅させられました。1755年に多数のアカディアンが英国人によって、ヴァージニア、カロライナ、さらにはルイジアナに強制移住させられ、残った者たちもケベックに逃れたり、フランスに帰国したりしました。

ここで、もう一つ新たな疑問を提起することができるでしょう。これほどに惨憺たる状況にあったにもかかわらず、英国人が予想したような帰結、つまり北米からのフランス語話者の完全なる絶滅につながらなかったのはなぜでしょうか。そこには、民衆の文化や生活への教訓ともなる抵抗があります。とはいえ、少数民族の辛抱強さはしばしば過小評価され、彼らはほとんど常に見下され、軽蔑の対象とさえなっています。（現在の意味でのカナダ、つまり大西洋から太平洋に及ぶ広大な国としての）カナダにおいては、長い間絶滅の途上にあると思われたのはフランス語話者だけでなく、文明の進歩の前で消え去ると信じられていた先住民の人々も同じことでした。現在のカナダでは「ファースト・ネイション」と呼ばれるこれらの民族は、社会・芸術・文学面において異例の再生を果たし、それによってどれほど歴史的展望というものが誤りに陥る可能性があり、また少数民族の命運を決めることに早計であるかを示しています。

確かなことは、ケベックとなった下流のカナダは、複数の要素により、持ちこたえたのです。その要因の一つに、エリート層の保守主義、カトリック信仰による社会的団結、農民人口が多数を占めたことが挙げられ、これらにより、近代世界や英米の影響を免れることができました。フランス系ケベックに生き残り（survance）を保障したこのようなアイデンティティの抵抗は驚くべきことですが、さらに驚くことがあるのです。フランス系ケベックが北米大陸上に、他のフランス語圏共同体を再構成することに貢献したということです。ヌーヴェル・フランスに由来するフランス系の古い居住地域がほとんど消滅するか散在させられてしまった時代に、こうして「失われた大陸」が「再び見出された群島」に変貌することになったのです。

それでは、「フランス系アメリカ」が再生するために、どのような事態が生じたのでしょうか。フランス系でカトリック、そして農民を主とするケベック住民は、

異例の人口増加により、急速に100万人を越し、200万人に達しました。そもそも当時は貧困が広まり、とりわけ耕作可能な土地が不足しているという問題がありました（なぜなら、セントローレンス川流域以外では農作には困難があったのです）。そこで、19世紀半ばごろには、南部への大量移住の動きが始まりました。目的地はニューイングランドの小さな工業都市でした。そこでは繊維工業が急発展し、人手が足りなかったのです。この集団移住（exode）は75年に渡って続き、何十万人ものフランス系カナダ人が移住することになりましたが、このような事態はケベックの歴史における最も重要な出来事の一つであったといえます。また、例えばアメリカの偉大な小説家ジャック・ケルアックの経歴や作品を理解するためには、絶対に必要な文化的・文学的事実でもあります。彼は「ビート・ジェネレーション Beat Generation」に属し、カルトの人気を誇った作品の一つである『オン・ザ・ロード On the Road』の作者です。この「ビート・ジェネレーション」には、アレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg）やウィリアム・バリウズ（William Burroughs）なども属しており、1950年から60年代に米国で一世を風靡しました。

ここで、早速に述べておきたいことは、次のようなことです。この歴史は、たとえ当初は英雄的なものがあつたとしても、北米フランコフォニーにとっては悲劇的な歴史であつたということです。米国の北東部（メイン州、ニューハンプシャー州、マサチューセッツ州など）に移住したフランス系カナダ人は、その大部分が自らの母語を忘れ、20世紀には米国人として同化したのです。こうしてケルアックは、ご存じのとおり、英語で小説を書いて栄光を勝ち取ることになりました。とはいえ、このような述べ方はニューイングランドにおけるフランス語話者の経験に関する貧弱で、単純化された物語り方であるといえるでしょう。

ここで19世紀後半の状況を想像してみましょう。ケベックから米国への移住者たちは、世界のどの地域における移民たちともほとんど同じように行動することになりました。つまり、自分たちの命運をより良いものとするを望みつつも、彼らは日々の生活様式を維持し、自らのアイデンティティの生き残りのために必要な文化的・宗教的な制度のいくつかを維持しようとしました。このようなことは、20世紀初頭に東欧から来たユダヤ系の人々やイタリアから来た人々がケベックにおいて行ったことであり、また米国やカナダの西海岸に上陸した中国人や日本人が行ったことでもあります。

こうして、1860年以降のニューイングランドには、「プチ・カナダ petits Canadas」と呼ばれる共同体が生まれたのです。それはフランス系カナダ人が家族生活、社会生活を維持していた工業都市の或る特定の地区を指します。「小教区」とは同じ教会に通うカトリックの共同体のことですが、この「小教区」が移住者たちの生活の中心となりました。つまり、カトリックとフランス語とが1世紀近くに渡って、彼らのアイデンティティの中心を成したのです。ボストンにほど近いローウェルという工業都市の一地区、このような「プチ・カナダ」において、1922年、ジャック・ケルアックが誕生するのです。

当時、ニューイングランドには数百のフランス系カナダ人の小教区と、多数のフ

ランス語新聞、濃密な社会生活が存在しました。ケルアックが青年期にあった頃、1936年に、今日では忘れられてしまった作家によってフランス語で書かれた小説が、『カナック *Canuck*』というタイトルで新聞の連載小説として発表されました³。ここで「カナック」という言葉を強調しておく必要があります。それというのも、これは「カナディアン」という言葉の侮蔑的・軽蔑的な指小辞であり、英系プロテスタントの米国人が「プチ・カナダ」のフランス系カトリック住民を指すときに用いたものです。この言葉は、かなり後の時代になって、ケベックの詩人ガストン・ミロン（Gaston Miron）の作品において、再び見出されることになります。例えば、彼が「呪われたカナック *damned canuck*」と言うとき、この表現はフランス系カナダ人がケベック人というアイデンティティを主張することで尊厳を再び見つけるまでのあいだ、彼らが自分の郷土（pays）にいながら味わってきた軽蔑や屈辱を示していると考えられるのです。

ジャック・ケルアックの「プチ・カナダ」は、「カナック」の貧しく暗い世界のあらゆる特徴を兼ね備えています。少年は7歳までフランス語だけで生活し、この年齢になって初めて英語を学び始めました。『ジェラルルのヴィジョン *Visions of Gerard*』『ドクター・サククス *Doctor Sax*』など、彼が後に発表する小説のいくつかは英語で書かれていても、ローウェルの「プチ・カナダ」を精緻に描写し、フランス語での会話の端々を多く含んでいます。その地区は陰鬱で、家々は憤ましいというよりも惨めでさえあり、近くの川は茶色く濁り、工場での労働は耐え難く、また騒々しいものです。そこでは家族生活が核になりましたが、典型的なフランス系カナダ人の母親がその中心にいました。彼女は自らの命運をあきらめ、子供たちを保護する立場にあり、また同時に非常にカトリック的でもありました。このような宗教的で、秘教的でさえある次元は、ジャックの兄であるジェラルルの悲劇的肖像においても、よく現れています。彼は不治の病に侵され、9歳で亡くなります。彼の名前をタイトルに含んだ小説において、ジェラルルという登場人物はカトリックの殉教者のように描かれ、物語内でこの聖人は人間の苦悩に対する贖罪の機能を果たしているのです。

ケルアックはアメリカで最も著名な作家の一人となりますが、この小説はローウェルの「プチ・カナダ」でのフランス系カトリックの幼少時代について、彼が極めて深い記憶を持ち続けたことを示しています。1950年ごろに書かれた何通かの手紙によると、彼はフランス語で偉大なアメリカに関する作品（une œuvre américaine）を書くことを夢見ていたことがわかっています。とはいえ、もし彼がそのような作品を書いていたとしても、大きな名声を勝ち得ることはなかったでしょうが。この夢については、2016年にケベックの或る研究者によって、1950年代にケルアックがフランス語で書いた幾つかの草稿が発見・刊行されたことで、より具体的に分かってきました。

本作品集は魅力的なもので、とりわけ自身がアメリカ大陸のフランス語話者である場合には、衝撃を受けずにはいられないでしょう⁴。ケルアックは米国でのフランス系カナダ人の状況を、貧困と排除の感覚によって特徴づけられる不幸な彷徨と

して描いています。同時に、彼は『デュルオズの伝説 *La Légende des Duluo*』の構想を持ち始めます。この *Duluo* という名前は、彼が自らの家族に与えたフィクションの名であると考えられます。彼の祖先であるケルアックは、かつてブルターニュからケベックへと移住した人物でした。「ミシェル・ド・ブルターニュ *Michel de Bretagne*」という名を持つ小説の話者に具現化された、ある貴族の家系が物語 (saga) を通じて再構成されることとなります。物語では、ジャックの祖父は新たな移住を経てニューイングランドへと移り住むこととなります。

このように家族の系譜は象徴的に救うことができるとはいえ、移民の悲劇 (drame) にはもう一つ別の活路があるともいえます。それは「アメリカン・ドリーム」、つまり貧困から抜け出し、豊かで有名になるという夢です。フィクションを通じて、ケルアックはもちろん自分自身について語っています。彼の分身は「オール・アメリカン」のフットボール選手、つまりスター選手になることを夢見ると同時に、ケルアックが数年後にそうなるように「オール・アメリカン」の作家になることも望んでいます。救済はもはや苦悩からではなく、高名からもたらされるのです。『途上で *Sur le chemin*』と題された他の長い小説草稿の中には、ローウェルのしがないフランス系カナダ人に栄光をもたらす『オン・ザ・ロード *On the road*』がすでに姿を現していることが見て取れます。

しかし、本作品をまったく比類のない文学体験とするのは、ケルアックの用いた言語です。それはニューイングランドのフランス系カナダ人の言語ですが、若き小説家はその言語の口承性の味わいを丸ごと再現しようと試みたのです。その言語はクレオール化されたフランス語といえるものです。つまり、英語表現、(英語・仏語が) 混交した言い回し、誤った言い回しが詰め込まれ、できるだけ発音に忠実に、音に従って転記された言語なのです。本作の結末部における幾つかの断章は、ローウェルのフランス系カナダ人やケルアック自身を苛んだ言語的悲劇を例証しています。「私にとって英語を話すことは難しいことです。なぜならプチ・カナダの自分のところではカナダ語を話していたからです。Sé dur pour mué parlé l'Angla parse jé toujours parlé le Canadien chez nous dans ti-Canada⁵」皆さんにこの言語の奇妙さがどの程度お分かりいただけるかわかりませんが、内容からだけでも、支配的な言語を話す地域に沈み込んだマイノリティの人々に対し、二言語状態がもたらす精神的重圧が分かるでしょう。このようなテーマはケベックを含めた北米フランコフォニーでは常につきまとうテーマの一つであったといえます。例えば、ケベックは1970年代に公式に単一言語主義の一形態を選択することになりますが、他方で特にモンレアルでは英語は顕在的なままでした。

ケルアックに関しては、彼は自国の言葉で書くのでなければ「オール・アメリカン」になれないであろうことを理解していました。しかし、著名になり、長年カリフォルニアに在住してからも、ローウェルに住む母親に会うために幾度も帰郷していました。1969年に46歳の若さで亡くなる1年前、ケルアックはモンレアルへの記念すべき訪問を行い、そこでテレビインタビューに出演します。アルコールの飲み過ぎでやつれた様子で、しかも実際少し酔った状態で、彼は初期の原稿に見出さ

れたあのクレオール化したフランス語で話しました。少し道を踏み外した大きな少年という風貌で、その話し方は時に番組収録に参加した聴衆の笑いを誘いました。そのような彼には愛着を感じざるを得ませんでした。しかし途中で彼はインタビュアーの話の遮った上で、ケベックの聴衆は自分を馬鹿にしているのかと尋ねたのです。ケベックからアメリカ合衆国への移住によって誕生したこのアメリカの偉大な作家は、そこでは好奇の対象となり、また自らの先祖の土地において一種の異邦人となってしまったのです。

* * *

先ほど1850年代から1860年以降の米国への大量移住についてお話しましたが、その長期的な結果の一つは、今日、約1000万人のアメリカ人（その半数〔原文ママ〕がニューイングランド在住）が、フランス系またはフランス系カナダの出自を持つと申告しているということです。ただし、そのほとんどが自分たちの言語を忘れていて、しかし、質的かつ長期的な影響がより重大だった別の移住の経路がありました。今日、カナダのオンタリオ州、マニトバ州、さらにはもっと西部の州において、フランス語表現作家が活躍するのは、こちらの経路によるところが大きいのです。また、東部についても、ニューブランズウィック州やノバスコシア州のアカディアンにもフランス語表現作家がいます。ただ、アカディアンの場合は、ケベックからの移住の結果ではありません。先ほど18世紀の強制移住とディアスポラ状態について簡単に触れましたが、彼らは徐々に大西洋岸地域の故郷の土地に再び根付いていったからです。このような途方もない帰還は、全く有り得ないような話なのですが、多くの勇氣と粘り強さによって実現され、現代の最も有名なアカディア作家アントニーヌ・マイエ（Antonine Maillet）に着想を与えました。アカディアンの帰還を描いた長大な叙事詩的物語によって、彼女はパリでゴンクール賞を受賞しました。また今日では、アカディア文学は独自の制度を備え、ケベック文学に対しても或る程度まで自律した状態を持つに至っています。この点については、後ほど改めて検討します。

さて、ここでは改めて19世紀末におけるケベック人の移住に話を戻しましょう。別の経路とは、米国へ向かうのではなく、西部へ向かうものでした。カナダ自体が西へと拡張していた時期でした。上流のカナダはオンタリオ州、下流のカナダはケベック州となり、1867年に創設されたカナダ連邦を構成する州の一部となりました。連邦拡大のもっとも重要なものは、西部への拡大であり、太平洋へ達することとなる鉄道がその後押しとなりました。中部大平原地域へと開けたマニトバ州を始めとして、他州が加わり、そこへ多数のヨーロッパ人が移住しました。イギリス人やスコットランド人はもちろんのこと、ウクライナ人、ロシア人、ポーランド人なども含まれます。西部には広大な土地がありましたので、ケベックのフランス系カナダ人の移住にも適していました。カトリック聖職者らが、フランス系カトリックの米国への移住により、同化や言語・宗教の喪失が起ることを危惧し始めたこと

も背景としてありました。このように拡張を続けるカナダに、フランス語話者が存在感と政治的重みをもつことは、より将来性のあることと思われました。

以上に加えて、もう一つ別の前提となる状況について述べる必要があるでしょうが、しかしそのためには別の講演が必要となるでしょう。ヌーヴェル・フランス時代の古い植民地は殆ど消失していましたが、フランス系カナダ人は、個別にというよりもむしろ無秩序に、北米全域へと散らばり続けたのです。五大湖地域、オンタリオ州北部、マニトバ州は、長らく慣れ親しまれた経路でした。かつて貿易会社に雇われたセントローレンス川流域のカナダ人たちは、北西の「上方の土地 les pays d'en haut」の経路を駆け巡り、先住民と毛皮取引を行っており、それは大平原地帯にまで及んでいました。これらの毛皮取引人たちは、過酷な仕事を請け負っていました。先住民の売る野生動物やビーバーの皮を大平原にある取引所で手に入れるため、彼らは大きな丸木舟に乗って2000～3000キロを走破しなくてはならなかったのです。

ところで、これらの旅するフランス系カナダ人の大部分は、セントローレンス川流域には二度と戻らず、先住民の女性と結婚し、オンタリオ州西北部やマニトバ州やさらに西部において小規模なコミュニティを作ったのです。その結果、19世紀には、メティスの人々が誕生したのです。彼らはクリー族、ソルト族、オジブウェ族、アシニボイン族などの先住民とフランス系の混血です（ただし英系との混血のメティスも存在しました）。西部地域にこれらのメティスが多数存在することは、モンREALやオンタリオ州の裕福なアングロサクソン人がカナダ横断鉄道建設に着手した際や、イギリス人やスコットランド人入植者がメティスの土地を占拠した際に、大きな障害となりました。メティスの抵抗の英雄ルイ・リエル（Louis Riel）は、ケベックで学業を修めた詩人であり、またメティスの真の国を建設することを夢見た人物でした。英系が次第に支配を強めていたカナダ政府によって、1885年に彼が逮捕され処刑されたことは、ケベックの人々に大きな衝撃を与えました。それというのも、リエルは（フランス系の）仲間と見なされており、当時はまだ人々の心に残っていた「フランス系アメリカ」というあの美しき夢を体現する人物だったからです。

このようなカナダの歴史の悲しいエピソードは、しかし19世紀末におけるケベック人の大規模な西部移住の障害にはなりません（しばしばカトリック司祭たちによって）以前よりも組織的に行われたこの移住は、ケルアックの祖先が目指したのとは別の地を目指すことになりました。もはやニューイングランドの繊維工場ではなく、セントローレンス川流域における村落共同体の生活を再現できる広大な土地を求めて移動したのです。村は教会を中心に編成され、周りを豊かで広大な農地に囲まれていました。また、オンタリオ北部の場合には、開拓と木材貿易にきわめて適した広大な森林に囲まれていました。

ケベック人たちの西部移住は、北米フランコフォニーの歴史において、別の意味において大きな出来事でもありました。当時まだ「フランス系カナダ」と呼ばれたものの「黄金時代」の始まりを告げる出来事だったのです。「フランス系カナダ」

とは、主たる拠点はケベックにありましたが、同時に大西洋沿岸で再生しつつあったアカディア、そしてオンタリオ州からマニトバ州や大平原の諸州を経て太平洋沿岸に至るまで数千キロに渡って散り散りに拡がっていた多数の小さなフランス語系コミュニティも含むものでした。このように散在しているにもかかわらず、このフランス系カナダは一世紀に渡り、ある種の文化的、民族的な実体を形成することになります。その土台には共通の言語や宗教だけでなく、ヌーヴェル・フランスと下流のカナダといった時代まで遡る同じ記憶の共有がありました。

ここで、ディアスポラという言葉を用いることもできるでしょう。ただ、ディアスポラといっても、21世紀の今私たちが経験しているような事態とは全く異なる速度にて、コミュニケーションや移動が行われていた世界においての話です。しかしながら、（手紙、電話による）交流や旅行によって、カナダ全域、さらには米国へも散らばる一つの大家族という印象が保たれていたのです。フランス系カナダの力の源は、変わることはない価値と象徴、権威的ではあるが相互扶助的でもある宗教、そして皆の知る文化（例えば伝統的な歌謡や踊り）への愛着にありました。他方で、同じ理由から、フランス系カナダの弱さや不安定さも生まれました。つまり、先述の文化という側面について言えば、それは過去に視線を向け、しばしば故郷ケベックへのノスタルジーに囚われていたため、近代社会への適応がうまくいかないものでもあったのです。芸術家や作家たちにとって、状況は殊に厳しいものでした。劇団も画廊も出版社も批評家も、その他芸術や文学を支える制度が欠けていたのです。さらに加えるべきは、カナダの栄光をなすにはかけ離れた事実です。ヨーロッパ人移民政策は、フランス語話者にとってきわめて不都合なものであり、さらに悪いことにフランス系カナダ人の居住者が最も多かった州（オンタリオ州、マニトバ州）では、フランス的事実を抑圧しようとする多大な努力がはらわれていたのです。例えば、それらの州では、数十年間に渡って学校におけるフランス語教育が禁止されていました。

ケベックの偉大な小説家ガブリエル・ロワ（*Gabrielle Roy*）が経験したことは、このような状況を例証するといえます。マニトバ州において最も重要なフランス系都市サン・ボニファスに生まれた彼女は、俳優になるという夢をかなえるために、まずヨーロッパへ発たなくてはなりません。その後、作家に転進してケベックに移住し、モンレアルの労働者地区の生活を描いた偉大な小説『東の間の幸福 *Bonheur d'occasion*』を書くのです。著名作家となった彼女は、その主要作品において、人情味と崇高な詩的豊かさをもって大平原の故郷を想起し続けました。例えば、『世界の果ての庭 *Un jardin au bout du monde*』が挙げられますが、私はこの作品はケベック文学全体において最も美しい作品の一つだと思います。同様に、ケベックにおいて最も重要な現代の文学批評家の一人であるジャン・エティエ＝ブレ（*Jean Ethier-Blais*）は、自らの才能を発揮する機会をモントリオールで探すため、自らの故郷であるオンタリオ州の小さなフランス系都市を離れざるを得ませんでした。

このような文化的な脆弱性や英語系マジョリティへの憂慮すべき同化率の高さにもかかわらず、ケベック州外のフランス語系共同体は存続したのです。そのような

中、第2次大戦後のケベックにおける変化は、まさに劇的な衝撃をもたらしました。1967年、フランス系カナダのすべての地域と社会のすべての部門を代表する千人以上の市民が、カナダにおけるフランス語話者の状況とその未来を見定めるために、モンリアルに集結したのです。しかしながら、そこでは亀裂も生じました。「フランス系カナダ大会 États généraux」の名で知られるこの集会において多数派を占めたケベック人たちは、ケベックにしか自己規定を見出さず、カナダのフランス語系共同体を信じようとしなかったのです。しかも、彼らの一部は政治的独立を主張さえたのです！

カナダ全域に散らばったフランス語系共同体にとって、これはまさに激震でした。アメリカ大陸におけるフランコフォニーの拠点たるケベックが、彼らを「見捨てた」のであり、つまりフランス系カナダは独りにさせられてしまったのです。またもや、それはフランス系カナダの歴史の終わりかと思われました。しかし、あらゆる予想に反して、その後私たちは一種の文化的・文学的な再生に立ち会うことになりました。

* * *

このような分裂の主たる帰結とは、1970年代以降、自らの所属する州や地域ごとに、アイデンティティの再構成が行われたということです。かつて「フランス系カナダ」と呼ばれたものは、完全に再定義されるに至ったのです。地理的・政治的領土に結びついたケベック・アイデンティティが主張される一方で、カナダの主なフランス語系共同体の方も自分たちの文化的・文学的な自律を要求するようになりました。これは全くもって新しい現象でした。そして、今やアカディア文学（特にニューブランズウィック州とノバスコシア州の一部を含む地域における文学）、フランス系オンタリオ文学、さらに少なからずフランス系マニトバ文学が語られるようになったのです。確かに、これらの文学は小規模であり、マイノリティー環境に置かれています。それに対して、確りと組織され発展したケベック文学は、巨人の様相を呈しています。アカディアやフランス系オンタリオの作家の中には、時にケベックで作品を出版する者もありますが、驚かされることは、このようなカナダのフランス語共同体のそれぞれが、独自の制度を持つに至っているということです。つまり、出版社、流通ネットワーク、アンソロジーや文学史といった教材です。同時に、特に演劇のような他の芸術形態も、独自の形で発達してきています。

1970年代以降のこのような再生は、しばしば反抗的な若い世代が突如文学界に現れたということとも繋がっています。彼ら反抗的な若い世代は、これまでの伝統やフォークロアとは一線を画して、現代的な文学と文化を創造しようとしました。文化的革命の様相を呈するこのような変容の中であって、最も重要な役割を演じていたのは詩人たちでした。1972年のアカディア出版創設を契機として、若い詩人たちは伝統的なアカディアン・エリートに見られるカトリック的保守主義や、アカディアの現実を蔑視することの多い英語系の人々の経済的・文化的権力に対して抵抗す

る意思を表明したのです。これらの詩人たちにおいては、あらゆる言語使用域が許容され、そこには「シアック（アカディア方言）」も含まれました。この「シアック」とは、（フランス語に）英語の語句を統合した混成言語であり、主にアカディアの文化拠点であるモンクトンの住民に話されています。この言語はジャック・ケルアックがローヴェルの「プチ・カナダ」において話し、書き記そうとさえしていた言語と共通点がないわけではありません。

アカディアの最も重要な詩人エルメネジルド・シアソン（Herménégilde Chiasson）は、映像アーティストで映画監督でもあります。ケルアックに関する非常に感動的なドキュメンタリー映画『偉大なるジャック Le Grand Jack』を制作しています。この作品は、ケルアックへの愛情に満ちたオマージュであると同時に、彼との親近性を表明した映画であるといえます。アカディアンは長らくアメリカ大陸全域において流浪者（exilé）でした。1755年の強制移住は、彼らを米国の最南端ルイジアナにまで追放し、そこでの彼らは相当数の人口がいたこともあり、後に「ケイジャン cajun」文化を創り出すことになりました。これはアメリカ南部のアカディア文化を指す言葉ですが、この文化はアフリカ系アメリカ人やメキシコ系ヒスパニックの文化と混交したものです。

後に多数のアカディアンがカナダ東部に帰還したとはいえ、この長い流浪（exil）の歴史が消し去られることはありませんでした。この流浪生活は、ケルアックが偉大なアメリカ作家を目指して小さな故郷を離れる決意をしたときに経験したのももありました。ニューヨークの文芸批評家宛に書かれた英語の手紙のなかで、彼は「全てのフランス系カナダ人がアメリカ全土で体験している恐るべきホームレス状態 horrible homelessness all French Canadians abroad in America have⁶」に苦しんでいると記していました。少なからずのアカディア詩人が、こうしてケルアックの内に、アカディアの歴史においても本質的な次元を見てとったのです。しかし、ジェラルド・ルブラン（Gerald Leblanc）のような一部の詩人は、このような流浪状態に肯定的価値を付与するような詩を書いています。流浪や根無し草の状態は、アメリカ大陸の広大な空間での旅となり、またそれは道中の精神の高揚であり、過ぎ去る景色への陶醉であり、つまり偉大な「アメリカン・ドリーム」の別ヴァージョンだということです。

1970年代から変化したのは、アカディアンが彼ら自らの土地から、このような放浪（nomade）の詩を書けるようになったということです。彼らにとっての自らの土地とは、例えばモンクトンと大西洋に面したアカディア沿岸地域であり、またそれら地域の風景と、時に泥を含んだ波が遡るプティコディアック川のことです。とはいえ、エルメネジルド・シアソンにとって、再び見出された自らの生まれ故郷にアカディアンたちが住まうということは憂愁を伴うものです。フランス語系ケベック人とは異なり、アカディアンは自分たちのニューブランズウィック州において、ある程度の政治的な力を発揮できるにしても、多数派ではありません。しかし、シアソンにとって、問題となり、また憂慮すべきであるのは、消費や商業主義の人工楽園となってしまったアメリカ大陸そのもの（アカディアであれ、他の地域であれ）

なのです。自分自身に語りかける形式をもった或る詩のなかで、彼は「君はもはや何を考えるべきか分からない、アメリカがそうするんだ／そんな印象を生むのだ、幾つもの紙コップの中で／砂糖が黒色に消えていくのを見ている時に tu ne sais plus quoi penser, l'Amérique fait ça /, fait cet effet-là quand dans les verres de papier / tu vois disparaître le sucre dans le noir⁷」ここでいう「黒色」とは、「ファースト・フード」のレストランで詩人が飲んでいる粗末なコーヒーのことを指しています。ただ、彼がここで表現するのは、一種の茫然自失とした状態、アメリカ大陸での現代的な生活が知性や理性を死に至らしめているという感覚です。この感覚については、残念ながら、近年の米国における政治的出来事により確認されるようです。幸いなことに、政治的面について言えば、現在のカナダはより分別があるように思われますが。

いずれにせよ、今やアカディア文学は活発化しており、多くの女性詩人や小説家の声を響かせることとなり⁸、共有された生きた記憶、アカディア社会そのものの活力、その教育ネットワークやモンクトンに置かれた大学の活力をその基盤としているのです。さらには、アカディアは一つのネットワークの中にあります。すなわち、ルイジアナの「従兄弟ケイジャン cousins cajuns」や、アカディアンが多数移住したケベック、そして詩人シアソンや彼の同郷人が時に本を出版するフランス系オンタリオとの交流を持っているのです。

* * *

実際オンタリオ州では、19世紀末から多くのケベック人が移住していた州北部に、ケベック州以外の場所で最も主要なフランス語系文学の出版社があり、1973年よりその活動を続けています。「プリーズ・ド・パロル社 *Prise de parole*」という名の出版社です。ここでもまた、若い詩人や反抗的な他の作家たちが、フランス系カナダやカトリックの伝統的な古い世界を揺さぶるような活動をしてきました。まさかサドベリーのような馴染み難い都市が活発な文学運動の拠点になろうとは誰も想像できなかったでしょう。サドベリーとは大都市圏からは離れた北部地域に位置し、文化的には何もなく、鉱業や林業に基盤がある場所でした。それまでは、フランス系カナダ文学が小規模な活動を行っていた拠点とは、カナダの首都オタワでした。オタワといえば、オンタリオ州とケベック州の境界にある首都ですが、そこでの文学活動はかなりブルジョワ的で保守的かつカトリック的な物でした。

サドベリーの若い詩人たちは、このような文化とは全く無縁です。彼らはむしろ1960年代の文化的継承者であって、ロック音楽、ジャック・ケルアック、ポップ・ディラン、ザ・ビートルズなどに傾倒しながら、同時代の作家の作品を読んでいます。驚くべきことに、彼らのリーダーの一人でプリーズ・ド・パロル社を長年率いることになる人物は、オンタリオ州南部生まれの英語話者でした。ロバート・ディクソン (Robert Dickson) という名のこの人物は、無類のフランス虜となり、フランス語で詩を書き、またサドベリーで文学教師となりました。ケベックの詩人たちと面識があったディクソンは、サドベリーの学生グループを連れて、モンレア

ルの偉大な詩人ガストン・ミロン（Gaston Miron）のもとを訪れたことさえあります。

先ほど 1967 年頃にケベック州と他のフランス系カナダとの間に亀裂が生じたことと申し上げました。かつてケベック州以外のフランス系カナダの年長のエリートたちは、この亀裂を放棄あるいは裏切りとさえ解釈したわけですが、サドベリーの若い詩人や芸術家は別様の形で解釈し、経験したのです。アカディアンの若い作家たちの場合も同様でした。彼らにとって、ケベック・アイデンティティの主張は、そこから派生した文学的・文化的な熱狂と共に、做すべき模範であり、創作活動における自律・近代性・大胆さの好例となったのです。そして、今や「新しいオンタリオ *Nouvel Ontario*」、それと共に「フランス系オンタリオ」文学が生まれようとしています。その誕生は、次にはオタワやトロントなどの大都市にも影響を及ぼすこととなるでしょう。600 万人の人口を擁する主要都市トロントには、フランス語話者は多く居住していますが、散り散りの状態にあります。

この未だ若い文学について、その全体像を示すことは私にはできません。ただ、カナダのフランス語共同体において最も重要な文学批評家フランソワ・パレ（François Paré）は、このような状況について、その後好評を博すことになる言い回しで、「狭さの文学 *littérature de l'exiguïté*」と表現しました。フランス語で *exiguïté* とは、人が窮屈で、居心地も悪いと感じるような狭い場所を意味します。例えば、家の中の狭苦しい寝室、狭苦しい部屋といった用い方をします。しかし、パレはこの言葉に、あらゆるマイノリティの文学に適用し得るような精神的・文化的な意味を与えました。つまり、それらの文学が「狭さ」に苦しんでいるとは、制度が不足しているか皆無であり、その存在が脆弱で、さらに大きな文化から見れば正統性に欠き、周縁的、よくて一風変わったものと見なされ、普遍的射程を備えていない文学であると捉えられるという状況を指すのです。

このような狭苦しさは、北アメリカという文脈から考えると、益々大きなものとなります。つまり、その文脈はほとんど完全に英語という唯一の言語によって、さらには自らのモデルと価値観を押し付けてくるアメリカ文化によって支配されているのです。サドベリー生まれの最も知られたフランス系オンタリオの詩人パトリス・デビヤン（Patrice Desbiens）は、彼の最も知られ、最も批評がなされた作品の一つ、『見えない男 *L'homme invisible / The Invisible Man*』において、先述のような状況を力強く表現しています。タイトルが示すようにこの本は 2 言語で書かれており、半ば詩的で、半ば物語的であるテキストを作者自身が訳しています。しかし、この翻訳には罣が仕掛けられており、徐々に不完全で忠実さからかけ離れていくのです。本作の始めの 2 頁で、既にこのようなずれが予告されます。そこではサドベリー北部にあるパトリス・デビヤンの小さな生まれ故郷が話題となっています。フランス語のページでは、単に「見えない男はオンタリオ州のティミンズに生まれた。彼はフランス系オンタリオ人 *Franco-Ontarien* である。」と書かれています。ところが、英語の翻訳では「見えない男はオンタリオ州のティミンズに生まれた。彼はフランス系カナダ人 *French-Canadien* である。」と書かれています。これは些細なこと

ではありません。この男を「フランス系カナダ人」と定義することで、英語（と英語を介した英語圏の権力）は、この人物を無害でフォークロア的な古いアイデンティティの中に閉じ込めてしまうのです。詩人はこうして、新しいフランス系オンタリオ人としてのアイデンティティ（それはフランス系カナダ人よりも厄介で従順ではないアイデンティティです）の正統性が、英語によって否定されていることを示しているのです。

さらに、「見えない」と形容される男を登場させることにより、この物語は間接的に「顕在的マイノリティ *minorité visible*」の概念にも言及しているのです。これは北米、特にカナダで広く普及している概念で、コーカサス系の白人マジョリティとは一見して身体的特徴が異なる移民や移民の子孫を指すためのカテゴリーとして、カナダ政府自身が用いているものです。明らかに、いかなる国であれアフリカやアジアからカナダへ移民すると、公式に「顕在的マイノリティ」に属することになります。なぜならば、より簡単に人種差別や外国人嫌い、外見のみによる差別の標的にされる可能性があるからです。カナダの連邦政府や各州政府は、このような不寛容と戦うための政策を採択しています。

ところで、フランス系カナダ人の子孫であり、アメリカ大陸でのフランス語話者であるということは、ほぼ常に「見えない=非顕在的 *invisible*」存在であるということです。いかなる明らかな身体的特徴によっても、彼らはアングロサクソンから区別されません。一見すると、それは有利なことと見えるでしょう。しかしよく考えてみると、それは同時に危険でもあるのです。それはニューイングランドやカナダの他地域に移住したケバック人たちも経験してきた危険です。彼らが集団としては敵対心や拒絶を引き起こすことがあるとしても、いつでも自らのアイデンティティを隠し、マジョリティの中に溶け込むことが容易にできるのです。例えば、名前を変えて、ルブランをホワイトに、ボワヴェールをグリーンウッドにすることは、当然ながら顔つきや肌の色を変えるよりも、ずっと容易なことです。この観点から言って、パトリス・デビヤンにおける「見えない男」は、若き日のジャック・ケルアックがすでに観察していたこと、つまり、フランス系カナダ人がアメリカ大陸の至る所で自分の出自を隠すことが容易であるという事態とも共通するのです。

これに加えて、もう一つ別のタイプの「不可視性」があります。米国やカナダの歴史は、支配的な英語系マジョリティにより語られることがほとんどです。もちろん米国においては一層そうでしょうが、或る程度まではカナダにおいてもそのようなのです。その結果として、フランス語話者の歴史的役割はしばしば過小評価され、ときに無視されるということがあります。例えば、フランス系カナダ人はアメリカ西部開拓史においてほぼ姿を現すことはありません。しかし、最近の研究により明らかとなったように、19世紀初頭にジェファースン大統領により、太平洋への経路を探索するために派遣されたルイス・クラーク探検隊は、フランス系カナダ人の助けなしには恐らく失敗したであろうと考えられます。フランス系カナダ人は、それよりずっと前から西部を往来しており、既にこの地域の先住民たちと強い絆を築いていました。とりわけ、大平原と太平洋岸の間に立ちはだかる障害、恐るべきロッ

キー山脈を越える際には、彼らは通訳やガイドとして大いに貢献したのです。

カナダでは、国家（ネイション）の偉大な物語は、概ねケベックには重要な地位を与えていますが、アカディアンやフランス系オンタリオ人、さらに西部の他のフランス語系共同体には、全くもって僅かな位置しか与えていません。このことは、フランス語話者の歴史の幾つものエピソード、例えばアカディアンの強制追放やフランス語教育の禁止などのエピソードが、国の名誉には程遠いものであるという事実からも説明がつきます。また、ケベックにおいてさえ、そのネイションの物語（ケベック的意味でのそれ）は、1960年代以降、カナダ全域に散らばったフランス語話者の存在を周縁へと追いやるだけでなく、しばしば無視さえてきたことを述べなくてはなりません。

とはいえ、1980年代から逆の動きが起こってきました。『失われた大陸から再び見出された群島へ *Du continent perdu à l'archipel retrouvé*』という作品が1983年に出版され、この時から、アメリカ大陸のフランコフォニーについての研究や著書が増加しました。これらの研究はしばしば驚きをもって迎えられました。例えば、初期のロサンゼルス市長の一人であったプルードント・ボードリー（Prudent Beaudry）は、モンレアル近郊で生まれ、財を成すためにカリフォルニアに移住したフランス系カナダ人だったのです。さらに、カウボーイ物語の作者として米国で有名になったウィル・ジェームズ（Will James）は、自身の本当の歴史を隠していました。実は彼の本名はエルネスト・デュフォー（Ernest Dufault）であり、やはりモンレアル近郊で生まれ、貨物列車に隠れてモンタナ州へ移住した人物でした。さらに、もう一つ驚くべき物語として、カナダと米国の国境地帯の五大湖地域には、奇妙な混成言語である「ミチフ語 *le mitchif / metchif*」が発見されたのです。この言語はフランス系カナダ人と先住民クリー族との間の混交を記し付けるものでした。

ニューイングランド、ルイジアナ、アカディア、フランス系オンタリオ、フランス系マニトバに関する研究について言えば、記憶の再征服とも呼べる仕事となされたとも言えます。その記憶とはケベックの記憶でもあり、カナダの起源以来、セントローレンス川流域での定住農村生活と、大陸全土に向けた移住・旅への渴望との間で常に引き裂かれてきた、フランス系民族の記憶なのです。ケベック州は、自律した政治的・文化的実体として自己を再定義することに囚われ、このような「集団移住 *exode*」を忘れ、自らが北米全域に作り出すことに貢献したフランス語話者ディアスポラを軽視する傾向にあったのです。

最後に、もう一つ付け加えておきましょう。アメリカ大陸のフランコフォニーへの関心が再び盛り上がったのは、ここ数十年間に起こったフランコフォニー研究やフランコフォニー自体の世界的な発展とも切り離すことはできないということです。これは単なる理論的な問題ではなく、マグレブを含むアフリカや、特にハイチを中心としたカリブ海域諸島を含み込んだ新たな交流ネットワークが重要になっているのです。さらに、北米のフランコフォニーはますます国際色豊かになっています。これが明らかなのは、ハイチ、アルジェリア、モロッコなどから移民が押し寄せるケベックの場合です。彼らはクレオール語やアラビア語だけな

く、フランス語も話します。この現象は、より規模は小さいものの、アカディアやオンタリオ州、さらには西部大平原においても起こっています。例えば、マニトバ州で最も期待される若きフランス語詩人の一人に、バルテレミー・ポリヴァール (Barthélémy Bolivar) がいますが、彼はハイチ生まれです。これらに加えて、特にここ 10 数年来、フランスから多くの若者たちが移住してきています。

とはいえ、ケベック州以外では英語系マジョリティへの同化は依然として強く続いています。全てのおめでたい楽天主義は誤りであるかもしれません。しかし、北米のフランコフォニーが文化的な復興を果たしていることは確かです。アカディアンのそれを例として、消滅に対して執拗にまた驚嘆すべき拒絶の意思を明確に表明しているのです。

翻訳：廣松 勲 (法政大学専任講師)
小松 祐子 (お茶の水女子大学准教授)

原注

- 1 Deau Louder et Éric Waddel (dir.), *Du continent perdu à l'archipel retrouvé*, Québec, Presses de l'Université Laval, 1983.
- 2 Voir Lionel Groulx, *Notre grande aventure* (1958), Montréal, BQ, 1990.
- 3 Camille Lessard, *Canuck*, « La vie des moulins », paru en feuilleton dans le journal *Le messenger*, Lewiston, Maine, 1936. Voir un extrait dans Maurice Poteet (dir.), *Textes de l'exode*, Montréal, Guérin littérature, 1987, pp. 403-418.
- 4 Jack Kerouac, *La vie est d'hommage* [sic], textes établis et préparés par Jean-Christophe Cloutier, Montréal, Boréal, 2016.
- 5 Jack Kerouac, *Ma vie est d'hommage*, p. 323.
- 6 Jack Kerouac, « Lettre à Yvonne Lemaitre, 8 septembre 1950 », dans Maurice Poteet (dir.), *Textes de l'exode*, p. 446.
- 7 Herménégilde Chiasson, « Hypnos s'enfuit de la rue Main », *Climats*, Moncton, Éditions d'Acadie, 1996, p. 64.
- 8 Notamment les poètes Dyane Léger et Rose Després, et la romancière France Daigle.

翻訳者の言葉

本翻訳は 2017 年 10 月に阪南大学、お茶の水女子大学、法政大学において行われた講演会の原稿を翻訳したものである。ケベック文学・文化・社会のみならず、引いては北米のフランコフォニーの現状を知るためにも極めて有意義な内容であったため、異例ではあるが、翻訳バージョンを掲載することとなった。共訳の作業としては、まず小松・廣松双方が作成した翻訳文を、小松訳を中心にして廣松が一つにまとめ、その後双方で訳文を検討するという形をとった。